

大学生の居住地・通学手段選択の決定過程に関する研究

九州大学大学院 学生会員 中田 和範
 九州大学大学院 正会員 外井 哲志
 九州大学大学院 正会員 梶田 佳孝

1. はじめに

大学生の居住地選択では、家賃など費用の制限や、部屋の広さといった住居形態、大学や都心、鉄道駅までの距離といった位置指標、近隣の商業施設などの周辺の居住環境が関係しているが、居住地選択とほぼ同時に大学への通学手段選択も行われると考えられる。すなわち、大学生の居住地と通学手段は互いに与条件あるいは結果として関連し合いながら選択されると考えられる。

しかし、居住地選択に関する既存の研究をみると、どのような過程を経て最終的に居住地・通学手段が決定されたのか、また、通学の条件がどの程度影響しているのかについて、ほとんど議論されていない。

これらのことを踏まえ、本研究では、九州大学の新キャンパス移転における学生の居住地選択を取り上げ、大学生の居住地決定過程と通学の条件の影響について明らかにすることを目的とする。

2. 調査の概要と居住地決定の流れ

九州大学新キャンパス周辺の地図と、学生の候補居住地を図1に示す。条件の入力を繰り返すことで居住地と通学手段を決定できる調査ソフトウェアをVisual Basicで作成し、九州大学在学学生を対象に配布して有効票を124回収した。調査の内容は、まず、個人属性、現在の住居・交通手段を尋ね、その後、新キャンパスにおける居住地選択において重視する居住地条件とその程度について回答する形式をとり、その条件に基づいて居住地選択・通学手段選択を行うような形式をとった。本研究における居住地決定のフローを図2に示す。

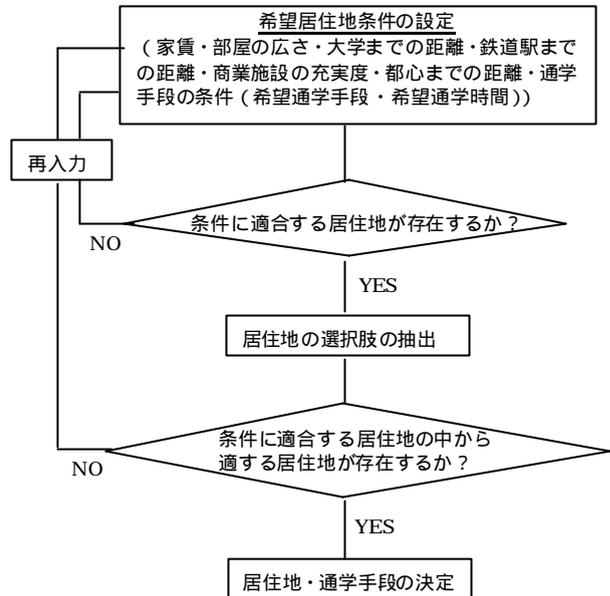


図2 調査ソフトウェアによる居住地決定フロー

3. 調査結果および考察

(1) 居住地決定過程の分析

居住地決定に至るまでに、回答者124人中居住地条件の入力を繰り返し行った人は90人であった。居住地条件の変動形態を表1に示す。また、居住地条件と変動形態の間の独立性の検定を行ったところ、1%有意となった。家賃、部屋の広さについては条件固定が多く、大学までの距離、鉄道駅までの距離は条件の変動が初期に起こったものが多い。また、部屋の広さ、商業施設の充実度、天神までの距離は重視しないと回答したものが多い。次に通学手段の条件を見てみると、居住地選択において通学手段の条件を重視すると回答した60人の中で、希望通学手段が固定であるのが32人、希望通学手段が変化したのは28人となっており、1つの交通手段に特定して居住地選択を行っている人が約半数いることがわかる。さらに、どの通学手段を重視したかについて調べたのが表2である。表2から通学手段の条件重視の内訳は自転車が多い。しかし、初期入力時には自転車としたものの、最終的には他の交通手段や重視しないへと移行したものが多い。

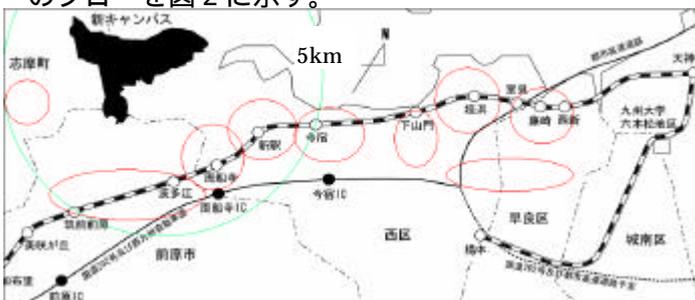


図1 九州大学新キャンパス周辺の地図と学生の想定居住地

表1 居住地条件の変動過程

変動形態	家賃	部屋の広さ	大学までの距離	鉄道駅までの距離	商業施設の充実度	天神までの距離
条件固定	44	33	8	19	21	10
後期流動的	14	6	11	8	9	2
初期流動的	15	10	53	31	20	19
重視しないまま	17	41	18	32	40	59

独立性の検定 判定: ** (1%有意)

通学手段の条件		
通学手段	通学時間	サンプル数
固定	固定	11
固定	流動的	21
変化	固定	24
変化	流動的	4
重視しないまま	重視しないまま	30

表2 通学手段の条件の手段の変動

	初期入力時								全体
	徒歩	自転車	バイク	原付	自動車	バス	鉄道	重視しない	
決定時	0	0	0	0	0	0	0	0	0
徒歩	1	0	0	0	0	0	0	0	2
自転車	0	20	0	0	0	0	0	0	7
バイク	0	3	4	0	0	0	0	0	5
原付	1	2	0	2	0	0	0	0	8
自動車	1	3	0	0	3	0	1	0	1
バス	0	0	0	0	0	1	0	0	4
鉄道	0	1	0	0	1	0	2	0	4
重視しない	1	7	0	1	1	1	1	30	42
全体	4	36	4	3	5	2	4	32	90

(2) 居住地決定過程による分類

表3のように条件の変化を3段階(通学手段の変化は4段階)に設定し、決定プロセスのデータを数量化3類で分析した。結果を表4に示す。

表3 居住地条件の決定過程の分類

	通学手段の条件を 除く居住地条件		通学手段の条件	
	通学手段	通学時間	通学手段	通学時間
1	固定	固定	固定	固定
2	変化	固定	変化	変化
3	重視しない	変化	変化	変化
4	重視しない	重視しない	重視しない	重視しない

表4 居住地決定過程による数量化3類の結果

カテゴリ	第1軸	第2軸	第3軸
家賃:1	-0.4764	-0.4207	0.9391
家賃:2	1.7266	0.0290	-0.6044
家賃:3	-0.6969	1.1924	-2.0088
部屋の広さ:1	0.2924	0.9147	0.4039
部屋の広さ:2	1.8406	-0.9070	1.3716
部屋の広さ:3	-0.7731	-0.5478	-0.7392
大学までの距離:1	-1.1996	-0.6821	2.2493
大学までの距離:2	0.5755	-0.3830	-1.2261
大学までの距離:3	-0.1046	1.4067	0.4992
鉄道駅までの距離:1	-0.2452	2.1124	0.0298
鉄道駅までの距離:2	1.4475	-0.1871	0.0175
鉄道駅までの距離:3	-0.8636	-0.8211	-0.0251
商業施設の充実度:1	-0.3341	2.4243	-0.6531
商業施設の充実度:2	2.2233	-0.8962	0.3291
商業施設の充実度:3	-0.8762	-0.8854	0.1969
天神までの距離:1	0.2623	3.4475	0.8452
天神までの距離:2	2.1664	-0.1799	1.4947
天神までの距離:3	-0.5778	-0.5975	-0.5222
通学手段の条件:1	-0.2036	0.5648	3.4246
通学手段の条件:2	1.2596	-0.2005	-0.6386
通学手段の条件:3	1.5254	-1.3792	-3.0988
通学手段の条件:4	-1.0557	0.0780	-0.3663

この結果を見ると、第1軸はどの項目も2のスコアが大きいことから、条件流動軸、第2軸は鉄道駅までの距離1、商業施設1、天神(都心)までの距離1が大きいことから都市要素希求軸、第3軸は通学手段の条件1、大学までの距離1が大きいことか

ら通学利便軸と名付ける。

次に、第1軸から第3軸までのサンプルスコアをもとにクラスター分析を行った。結果から大きく3つのグループに分かれ、それぞれのグループ別にサンプルスコアの平均を求めると表5のようなった。

表5 グループの各軸のサンプルスコアの平均

グループ	第1軸	第2軸	第3軸
1	0.835662	-0.49232	-0.45821
2	-0.67553	-0.36108	0.892547
3	-0.25646	1.036659	-0.46856

表5より、グループ1は条件流動型、グループ2は通学条件固定型、グループ3は都市要素希求型の3パターンが存在することが分かった。この3パターンの性別・居住地・通学手段の特徴を表6に示す。表6より、性別では違いは特になかったが、居住地、通学手段で有意差が生じている。条件流動型は学生寮以外の大学から比較的近い伊都地区が多く、通学条件固定型は学生寮を含む大学から近い居住地を多く選択している。都市要素希求型は伊都地区や大学から遠い姪浜・西新地区が多い。通学手段では、都市要素希求型は他の型と比較して自転車が多く、自動車が少い。

表6 性別・居住地・通学手段のグループの特徴

		条件流動的	大学通学固定	周辺環境固定	全体	判定
性別	全体	45	42	36	123	
性別	男	34	37	31	102	
	女	11	5	5	21	
居住地	学生寮	3	16	0	19	
	伊都地区	33	22	22	77	
	前原地区	5	2	0	7	**
	姪浜地区	4	2	9	15	
通学手段	西新地区	0	0	5	5	
	徒歩	1	5	0	6	
	自転車	25	23	12	60	
	バイク 原付	10	10	12	32	*
通学手段	自動車	6	4	9	19	
	バス	3	0	1	4	
	鉄道	0	0	2	2	

判定: 独立性の検定 ** (1%有意) * (5%有意)

4. まとめと今後の課題

本研究では、居住地選択プロセスの分析の結果、条件流動型、通学条件固定型、都市要素希求型の3タイプがあること、また、通学条件を固定するタイプが3~4割存在することが明らかになった。今後は、居住地決定過程のパターン別に、居住地選択モデルを作成する予定である。

参考文献

岡本直久・土井健司・紀伊雅敦: 住環境に対する学生の評価構造の分析、土木学会第50回年次学術講演会、平成13年10月